
迷宮街の死神

膨れ女

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷宮街の死神

【Nコード】

N9037Z

【作者名】

膨れ女

【あらすじ】

きつい、汚い、危険。あと臭い。これが迷宮探索の現実だ。新人探索者の四割が一ヶ月以内に死亡・失踪する過酷な迷宮街において、探索歴四年のベテランのオレは探索者達から《死神》という不名誉なあだ名を付けられ、恐れられていた。誰もパーティーを組んでくれないぼっちなオレが、ある日一人の少女と出会う。

プロローグ（前書き）

自分が読みたい小説を書いてみました。

プロローグ

【アルサライの地下迷宮 第二層】

蔦に覆われた薄暗い部屋の中に男は一人立っていた。

部屋からは二本の通路が延びており、男の隣に置かれているランタンの明かりによって、通路にまで仄かに光が差し込んでいる。男は慎重な面持ちで、片方の通路の先をじっと見据えている。

そうして幾ばくか時間がたった後に、変化は訪れた。

男の視線の先にある通路の空間が、ぐにゃり、と曲がる。瞬間、何もないはずの空間から、三つの白い影が出現した。白い影は次第に四足歩行の獣に形を変えてゆく。

出来上がった三体の獣は、男を食い殺さんがために、隊列を組んで部屋の中へと駆けてゆく。

———お次は白い犬ところ三匹か

左手に魔力を集める。

『フォビア、我を恐れよ』

『恐怖』の魔法を三体の白い犬ところ、《ホワイトファング》に唱えた。

白い犬っころの一体が何かに怯えるように足を止めたが、残りの二体は効果がなかったのか部屋の中に我先にと押し寄せてくる。男は右手に持っていた大薙刀を構え、部屋の入り口で獣を待ち構えた。

———今だ！

男は体格よりも大きい大薙刀を振りかぶる。大薙刀の刃の部分が、一体の《ホワイトフアング》の頭と体を分離し、吹っ飛んだ《ホワイトフアング》の頭が通路の壁に赤いしみをつくった。

男は大薙刀と共に体を回転させながら、柄についてる金属部分である石突を、今まさに男の頸動脈を噛み切ろうとしていたもう一体の《ホワイトフアング》の脳天に突きつける。

頭蓋骨が碎ける鈍い音が鳴り、辺り一面にさびた鉄のような血の匂いが充満した。

鈍い音を聞いてようやく我に返った最後の《ホワイトフアング》は、目の前で展開される一方的な殺戮に身を固めた。野生の本能が逃げろと忠告している。

しかし、我に返った白い犬っころが、逃げようとしたのか、襲いかかろうとしたのかは、男には知る機会はなかった。なぜなら、男が発した一筋の『電撃』によって、最後の《ホワイトフアング》は真っ黒に焦げた塊になってしまったからだ。



きつい

汚い

危険

これが迷宮探索者の仕事のすべてだと思う。あと臭いを入れてもいいかな。

オレは白い犬っころたちの皮と牙を死骸から剥ぎ取り、撤退の準備をする。剥ぎ取り箇所以外の部位は、そのうち迷宮に吸収されて消えてしまうので、その場に放置しておいた。

この三匹分の皮と牙の買い取り価格は、大体金貨二枚。大体十日分の生活費である。四半刻以下の時間で稼げる金額としては、破格とも言える。ただし、それが自分の命を賭けるに値する金額かといえば、正直怪しい。死んだら元も子もないのだ。オレは訳あって、一人で狩っているからこの価格なだけで、普通の六人パーティーなら六分の一で、二日分の生活費にもならない。

そもそも、実質四半刻以下の時間で稼げるといえども、そこにいたるまでの準備が長い。武器の手入れから含めた準備期間としては半日相当かかる。いわゆる探索暦四年のベテランのオレがこの程度の収入なのだから、大半の探索者にとって迷宮探索は割りに合

わないはずだ。

とはいっても、今ガイリアあたりでドンパチやってる戦争屋たちに比べれば理想の職場かもしれない。基本的には人を殺さずに済むし、成果に見合った報酬も出る。金さえ溜まれば、引退もできる。ただ、人を殺さずに済むというのは理想論で、時には同業者を殺めなければ、迷宮街で無事に生きてゆけないのも事実、のはずだ。

現にオレは同業者を殺めている。

それこそが、オレがぼっちで迷宮にもぐっている理由の一因なのだろう。決してコミュニケーション能力がないとか、一匹狼を気取りたいとか、そういう理由ではない、と思う。たぶん、な！

そう。オレは、「計十人の同業者を殺した」ということで、この迷宮街【聖都アルサライ】における迷宮探索者コミュニティの中で、《死神》、という不名誉なあだ名をつけられていた。《死神》って。

1 ◇五十人中二十人

照りつける太陽は、迷宮の暗がり慣れ切った目にはいくらかまぶし過ぎた。

フード付きのローブを被って、大薙刀を背中に担ぎ、迷宮街を闊歩する。迷宮から出た時刻は昼の刻を一刻ほど過ぎた頃合いだった。

「今日は、一層を攻略するぜ！」

「そうね、そろそろ力も付いてきた頃かしら」

「目指せ一日一金貨だなっ」

うつ向いて歩いているオレの前方から、六人組のパーティーらしき集団が、楽しげに会話をしながら歩いてきた。

彼らの目は希望に満ち、未知の世界と冒険に心は震え、物語の中の英雄に胸を馳せている。

長くはないな、と思った。

五十人中二十人。

一ヶ月のうちに迷宮街に新規参入する探索者のうち、一か月以内に迷宮街で死亡もしくは失踪する人数である。残る三十人の内、二十人は一年を待たず、死亡もしくは引退し、探索者として一年以上生計を立てられるのは、十人がやっとだ。

目の前の若者たち六人は、迷宮に潜りはじめて一週間程度だろう。彼らの目には恐れがなく、彼らには猜疑心が欠け、彼らの胸には

慎重さが足りない。

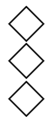
迷宮で生き残るのに必要なものが全て欠けている。 故に五十人の内の二十人になる。

そんなことを考えていると、向こうの六人がこちらに気づく。彼らの会話から笑いが消え、沈黙が訪れた。

———参ったなあ

潜って一週間の新人達も、自分のことは認識しているようだ。オレ《死神》という認識が蔓延している現実に対して自嘲げに笑い、うつ向きながら彼らを横切る。 オレは少しの間、彼らの無事を心の中で祈った。

ちなみに潜って一週間の彼らが知っていたのは決して偶然ではない。 彼、すなわち《死神》は迷宮探索者の間で出回っている迷宮街危険人物リストで貫録の危険人物第一位を獲得しているのだ。ぼっちの彼には今のところ知る由も無いが。



アルサライ迷宮管理機構。 通称、【機関】。

迷宮探索者の登録、迷宮における獲得物品の買取、トレーニング施設の運営、住宅・宿泊施設の運営、武具屋などの店舗の運営、冠婚葬祭など迷宮探索に関わる事業を一手に引き受ける機関である。

オレは今、【機関】の本部に来ている。
というのも、今日の迷宮探索の成果を金に替えるためだ。

基本的に本部は、物品の買取と迷宮探索者登録の二つの事務を請け負っている。

迷宮探索者登録が本部で行われるのはともかく、物品の買取が本部で行われる理由は、迷宮探索者の生存確認のため、らしい。例えば、迷宮で手に入れた物を毎日売っていた人間が、ある日突然こなくなるということがあったら、十中八九そいつは死んでいるか、トラブルに巻き込まれている。

基本的に探索者には不干渉の立場を取っている【機関】としては、探索者の内情を探るのはタブーとされている。よって最も効率的に探索者の管理を行うには、冒険者の買取の記録を付けるのが一番というわけだ。

生存確認以外にも、買取の内容によって、探索者がいつ誰と迷宮のどの層でどれだけの間潜っていたかがわかるため、探索者の能力や交友関係、行動パターンを知ることが買取の記録だけで可能となる。

よって、迷宮探索者の登録、管理と同じ場所で買取を行うのはある意味当然といえるだろう。

「え、ええ。か、確認させていただきます。《ホワイトファンク》

の牙六つ、か、皮四つ、《オーク》の牙四つ、《ブルーゼラチン》の核九つ、《ポーパルラビット》の爪一つで、よ、よろしいですか？」

恐れ of 籠った声で、買取担当である四十過ぎの中年男性が問いかけてくる。おそらく、《ホワイトフアング》の牙と皮の数が同じじゃないのが後ろめたいのだろう。

少し考えて、返事をする。

「《ホワイトフアング》の皮は、状態の如何に関わらず買取ではなかったのか？ 確かにこの二つは黒こげだが…」

オレの言葉に、中年男の買い取り担当の目が泳ぎ始めた。

「も、申し訳ありません。せ、先日、ほ、本部の方針で皮類は、じ、状態によっては買取不可ということが、け、決定しまして…」

まあ、皮は衣服などに利用されるだろうから、黒こげではまずいのだろう。無論、黒こげでも使い道がないわけではないだろうが、この前百個近く黒こげの《ホワイトフアング》の皮を持ち込んだのが効いたようだ。

迷宮の物品の相場は変動しやすいから、こういうこともあるだろう。仕方がないから、このまま交渉を進めよう。

「いくらだ」

「は、はい！ その二つの皮も、は、半額で買い取らせていただきます！ よって全部で金貨九と銀貨十五となります！ これで勘

弁してください！」

何か発言の意図を勘違いされているような気がするが、当初提示されるはずの金額よりも損はしてないのでこのまま交渉を進めてしまおう。銀貨十六枚で金貨一枚なので、今回の探索で大体金貨十枚程度の手に入ったことになる。

「あ、ありがとうございました！」

何か言いたそうな買取担当を横目に、金を受け取る。オレは脅したつもりはないからね？

これ以上ここに用はないので、今日は早めに酒でも飲みに行くかと考えながら、本部の入り口へと向かう。オレが入り口前にあるエントランスホールに差し掛かったとき、ちょうど一人の新人が本部に足を踏み入れようとしていた。

赤毛の短髪、整った顔立ちに、気品が感じられる凛とした佇まいで、高級そうな鎧に身を纏い、煌びやかな宝飾のある剣を携えて、辺りを見回している。年は十五、十六だろうか、身長は五尺程度でオレよりも一回り小さい。

———またか

どうみても、五十人中の二十人に入りそうな少女がそこにいた。

2 ◇少女と死神

「嬢ちゃん、迷宮街は初めてだろう？」

「ボクに何の用ですか？ ナンパならもう間に合ってますけど」

いきなり出鼻を挫かれた。 流石に嬢ちゃんゝはまずかったか。

このように先行きが不安そうな新人探索者に声をかけるのは、何もこの少女が初めてではない。 親切心、老婆心の類で、一ヶ月も迷宮街で生きられそうにない探索者に、発作的に声をかけてしまうことがこれまで幾度かあった。 その海のように深い親切心がこの少女には、スケベ心だと解釈されてしまったらしい。 スケベ心なんて少ししかないからな。

「い、いや、そうではなくて、だな。 迷宮探索者志望の君に忠告しようと思ってだな」

「なんですか？」

怪訝そうな目でこっちを見ている。

こういう目で見られるのはしょっちゅうだが、ナンパの類だと思われるのは癪だ。

紳士的かつスマートさを心がけて、少女に忠告する。

「このまま探索者になっても、君は一ヶ月この迷宮街で無事には過ごせないだろう」

今まで同じように忠告して、死んでいった探索者たちの姿が脳裏によみがえる。

オレが忠告したところで、彼らの死の運命は大して変わらなかった。

そして、恐らく今回も、この少女が行き着く先は変わらないだろう。

この行為が自己満足であることは重々認識しているのだ。

「……………犯罪予告？」

なぜか変な方向に解釈されてしまった。

どうしてこうなった。

あわてて、修正を入れる。

「そ、そんなつもりはないぞ。オレが言いたいのは、君は迷宮に潜るには力不足ということだ」

だから潜るな、とは言えない。

十五、十六の少女が一人で迷宮街を訪れ、迷宮に潜ろうと決意しているのだ。

潜らなきゃいけない、彼女なりの理由があるのだろう。

最初からわかっていたことだが、こんな忠告は無駄なのだ。忠告を受け入れて、じゃあ探索者やめます、みたいな人間はハナから

この街には来ない。死のうと思ってこの迷宮街に訪れる人間はない。探索者としての素質があらうがなかりうが、迷宮街を訪れる人間は必ず迷宮に潜る。その結果、死んだり生き残ったりするだけだ。

これ以上話しても、この少女の死を知ったときの悲しみが増すだけだと思い、この場を立ち去ろうとした。だが、少女は真っ直ぐオレの目を見据えて、こう言い放った。

「じゃあ、どうすればいいですか？」

少女は何の含みも無いような透き通る目をしていた。吸い込まれるような茶色の瞳から、オレは目を逸らすことができなかった。彼女の疑問も最もだ。偉そうに忠告するからには、オレは何か答えを持ってなきゃいけなかったのかもしれない。

でも、答えはない。迷宮街にいる以上、絶対的な安全はどこにもない。

どうすればいいのか、それが分かれば迷宮街で死ぬ人間などいないのだ。

オレは苦し紛れに言葉を紡ぎだす。

「…………迷宮に潜らなきゃいい。迷宮に潜る以上、常に死の危険がそばにある。どんなに万全を尽くしても、必ず死はどこかにある。決して死なない迷宮の潜り方なんて存在しない。……だが……いや。そうだな……。もし、金銭が許すのなら、可能な限り迷宮に潜る前に、トレーニング施設でトレーニングに励むべきだ。そうすること

で死ぬ確率を極限まで薄めることは可能……かもしれない。……でも……それでも、死ぬときには死ぬ」

ひどいアドバイスがあつたものだ。

でもこれが、四年間オレが見てきた迷宮街の真実だ。

少女は困つたような顔をした後、少し考えて、笑いながら答えた。

「それならボクはこれから一ヶ月迷宮に行かずにトレーニング施設にだけ行きます。」

これで貴方の死刑宣告も大外れですね」

彼女はオレの言葉を聞き、何かを感じ入つたようで、オレに笑顔を振りまいてくる。

彼女の笑顔が、すさんだ迷宮街の生活を送っていたオレには少しばかり眩し過ぎる。

突き放さなくては、と思った。

でないと彼女は、長く生きられない。

「あと、もう一つ忠告しようか」

「なんですか？」

今度は笑顔でこちらを見ている。

これからオレは彼女を突き放すのだ。

少女の笑顔が、少し辛い。

「あまり人の言葉を信用しないほうがいい。この迷宮街で人を信じたら、食い物にされる。さしずめ君なら慰み者にされるか、売り飛ばされるかがオチだ。そして――」

「で、でも、貴方の忠告は」

少女はオレの言わんとしていることが分かるのか、オレの弁護をしようとし始めた。

やはり、この少女は迷宮街には向いていない。迷宮街で生活するには純粹すぎる。

オレは少女の言葉をさえぎって、こう言い放った。

「そして、オレは迷宮街で最も信用してはいけない人間だ。」

―――《死神》と呼ばれている

そう続けて、オレはその場を逃げるように去った。

このあと、オレは酒場で一人手酌をしながら、最後の《死神》の部分はないわー、と悶々とすることになる。

今年で二十一になる男が言う台詞ではない、恥ずかしすぎる。しかも年下の女の子に向かって。

誰か、オレを殺してくれ。

ころしてくれー。

いやいや、ちょっと待て。

オレは事実を言ったまでだ。

悪いのは《死神》なんていうあだ名だ。

こんなあだ名をつけた奴が悪いんだ。

よしそいつを殺そう。

ころそう。

酒場の隅のほうで一人酒をあおりながら、「ころしてしてくれー」
とか「ころそう」とか呟いていた《死神》の傍には、誰も近づかなか
ったという。

3 ◇少女エリー

〈迷宮街危険人物リスト〉 彼らとはパーティを組んではいけない！

第1位 トシアキ、通称《死神》

危険度★★★★★+

出会ったら、死刑宣告されないことを祈れ！

特徴…見たまんま死神スタイル

血で汚れたフードの付いたローブを被り、死神の大鎌らしき武器を持っている

〈伝説の数々〉

・6人パーティで彼と迷宮に潜ったら、5人が死んで彼1人だけが迷宮の『三層』から戻ってきた。

・「そんな危険なわけがない」といって彼と組んだベテラン5人が一日後死体で戻ってきた。

・迷宮街に初めてきた新人が、「一ヶ月後に死ぬ」と死刑宣告を受けた

・新人探索者の1／3が死刑宣告経験者。その的中率の高さから、そもそも死にやすい「女、子どもほど危ない」

・買取担当が彼に脅されるのは日常茶飯事

・彼が俯いて笑うのを聞いた日に、迷宮で怪我をする確率が150%。一度怪我をして、さらに怪我をするのが50%の意味。

・彼が探索した辺りに、《ホワイトフアング》が百体以上真っ黒焦げになって倒れていた

・『四層極悪モンスター』の《スライム》が彼と出会って数分で死んだ

- ・彼が一日に稼ぐ金貨の量は平均20枚。多い日は100枚も。
- ・迷宮における死亡者は一ヶ月平均30人、うち約20人が彼による何らかの被害者。



「やっぱり、これって昼間に会った人だよね…」

宿屋の部屋で、赤毛の少女エリーはため息をつく。

手元には、探索初心者マニュアル。迷宮街危険人物リストのページにある写真をじっと見ていた。

このマニュアルは先ほど食事を取っていた食堂で、一人の先輩探索者からいただいたものだ。

内容は突っ込みどころ満載で、正直いろいろと疑わしい部分もあるけれど。

（特に『何らか』の被害者って何ですか！？ 『何らか』って！）

昼間に《死神》さんに死刑宣告された事実を、先輩探索者たちに告げると一同に同情をされた。

このマニュアルを見ても、あの人がいかに有名だったのかがわかる。

血の付いた武器を背にフードを被っている姿は、不審者そのものだったし、目立つのは確かだ。

「悪い人には思えなかったけど…」

《死神》さんの忠告通り、ボクは明日から訓練所デビューをすることになった。

女性だけのパーティを組んでいる先輩探索者たちのグループ「アマゾネス」に勧誘を受け、将来的にパーティに参加する代わりに、特訓をしてもらうことが決まったのだ。

一ヶ月特訓したい、といったら驚かれたけど（普通特訓は二、三日らしいよ！）

《死神》さんの死刑宣告の話をしたら、あっさり了承してもらえた。

どうやら、「アマゾネス」の過去のメンバーにも死刑宣告をされた人がいたらしく、しかも本当にちょうど一ヶ月後に迷宮で罠にかかって亡くなってしまったらしい。それからというもの、《死神》さんは「アマゾネス」のグループの中で、畏怖の対象になっているようだった。

「早く強くならないと…」

ごろん、とベッドに横になって、エリーは呟く。

今は無き故郷に、思いを馳せる。

追っ手が来るのはいつになるだろうか。

それまでに、自分の身を守り、生き抜く手段を得なくてはならない。

（そのためにボクはこの忌々しい聖都に来たんだ！）

手持ちが残りわずかになっている財布を見てため息をつく。
この都市に来るまでに、大半を使ってしまった。

この額だけで、一ヶ月も生活してゆけるのか、わからない。

「お金がこんなに大切だなんて、知らなかったよ…」

いざとなったら、宝飾の付いた剣を売って生活費の足しにしないてはならない。

自分と王家を繋ぐ証でもあるから、そう簡単には手放したくはないけど、背に腹はかえられない。

目が潤んで、目の前の天井がぼやけてくる。

こここのところ泣いてばっかだ。

泣いた分だけ、自分がどんどん弱くなる気がするので、必死に涙をこらえる。

「ぐすつ……明日は早いんだ。早く寝よう」

エリザベッタⅡナディン。

ガイリア半島の今は亡き国家、【イピロニア】の第三王女。

それが彼女の正体である。

4 ◇二大宗教（前書き）

世界観の説明回です

4 ◇二大宗教

ユタ教とムハマド教。

かたや東側諸国の国教、かたや西側諸国の国教。この二大宗教における最大の不幸は、同一の聖地を持っていることだった。

そして、この不幸が本格的にガイリア半島に襲いかかったきっかけは、今から三十年前に聖地で起きた〈事件〉。

へ【聖都アルサライ】における迷宮の出現〈

原因は三十年間、多くの学者、知識人、占い師、呪術師もろもろが、あーだこーだ言い合っているが、未だ共通認識は作られていない。

ただ〈事件〉が起きる舞台としては、聖地はどこよりも相応しかったのかもしれない。と、宗教家は言っていたりする。

そもそも、【聖都アルサライ】は地理的には東側諸国に属していた。しかし、聖都は宗教的な理由から東側諸国のどの国にも属さず、政治的干渉を受けない中立都市として存在していた。

よって長年にわたり、【聖都アルサライ】は東側諸国からのユタ教の信者の巡礼だけでなく、西側諸国のムハマド教の巡礼も等しく受け入れる国際都市として栄え続けていた。

三十年前、迷宮が出現するまでは。

迷宮が出現して一月も立たないうちに、迷宮から異形の怪物たちが出現。怪物たちは未知の術を用い、無差別に市民と巡礼者を攻撃し、多くの死を聖都にもたらした。

半年後、迷宮の怪物により、自らの国の安全までも脅かされ始めていると認識した東側諸国は、連合軍を聖都に派遣し、多くの犠牲を出しながらも怪物を迷宮内部に押しとどめることに成功。その過程で聖都における東側諸国の影響力は増していった。

問題はここから。

怪物が操る未知の術、魔法、が歴史の大きな転換点を生み出すことになる。多くの犠牲と研究と一部の人たちの妄想によって、魔法に関して次の三つの事実(?)が判明した。ちなみに妄想の占める割合は六割以上。ほぼ妄想じゃねーか。

◆怪物は迷宮が生み出す魔力によって生まれ、体内に蓄えた魔力を用いて魔法を行使しているということ(全て妄想)

◆魔力が充満している聖都(妄想)においては、人間も魔法を利用することが可能(事実!)であること

◆怪物が死ぬと多くの魔力は怪物の死骸とともに消失するが、怪物の死骸の一部に残りの魔力が濃縮され(ここまで妄想)、消失せずにマジックアイテムとして残ること(事実!)

このマジックアイテムはどれも、既存の技術の枠組みを超えた性能を持っていた。

一部の希少なマジックアイテムは同質量の金よりも高い額で取引され、マジックアイテムは東側諸国に莫大な利益を与えることになる。

まさに〈魔力革命〉であった。と、一部の人たちは言っている。

この事態が、西側諸国にとっては面白いはずがない。

彼らにとってみれば、聖都における迷宮の出現と魔力の存在は、自国のムハマド教の神の奇跡に他ならない。故に、ムハマド教の神がもたらした利益を異教徒ユタ教の集団が手にしている、つてことになる。

迷宮が出現してから一年後、西側諸国の大国【フランツ王国】のムハマド教会は【聖地アルサライ】の奪還を宣言。

ムハマド教正規軍、通称クルキアータが聖都に向けて進軍を開始した。

〈クルキアータ戦争〉の始まりである。

そしてこの戦争で最も被害を受けたのが、東側諸国と西側諸国の中継地点。ガイリア半島であった。

大義名分を持った人間ほど恐ろしい生き物はいないと言ったのは誰だっただろうか。

ムハマド教正規軍クルキアータがガイリア半島で行った所業は、まさに悲惨。

殺戮、略奪、強姦、人間が行えるありとあらゆる非道が行われ、難民と戦争孤児が、東側諸国にあふれ返った。

以後三十年間、迷宮の怪物によって流された血のおよそ百倍がガイリア半島に流れ、その結果多くの小国が滅亡した。その中には赤毛の少女エリーの祖国【イピロニア】も含まれている。

それでも、迷宮街には、彼女の身の上を真に同情するものは恐らくいないだろう。彼女は戦争による多くの被害者のうちのたった一人に過ぎないのだ。

現在、迷宮街となった聖都における迷宮探索者の大半が、この戦争の何らかの被害者であった。

そして、勿論というかなんというか、我らが《死神》トシアキも例に漏れず、《クルキアータ戦争》の被害者だった。

トシアキが物心付いたときには親は既に無く、多くの戦争孤児に囲まれて生活していた。

5 ◇先生

——もう月末か

線香の香りが街中を埋め尽くす。この香りに慣れてしまったのは、いつだったか。

大通りに面した広場で行われている【機関】主催の迷宮街合同葬儀を横目に、オレは時間が経つのを待っていた。

今日の《死神》は相変わらずフード付きローブは被っているが、いつものように大薙刀を携えてはいない。迷宮に潜る予定はなかった。

手元の懐中時計が、昼の刻を告げようとしている。そろそろだな、と思った。

「トシアキさん。お久しゅうなあ」

白髪混じりの老女が、ゆっくりとした足取りでこちらに近づいてくる。

「一ヶ月ぶりですね。ミリア先生」

オレは深くお辞儀をした。

「ご無事で何よりですよ。いくら稼いでも死んでもうたら元も子もねえもんで。トシアキさんはあの子らの希望じゃけえ」

「彼らは元気ですか」

「いや、もう元気いっぱい手で負えんありさまじゃ。あの子らを

見てると若い頃のウパさんとトシアキさんを思い出してしもうて。
ほんま、時間が経つのは早いいう。もう三年になるかいの」

「ええ…」

オレは顔をうつ向ける。

「ウパさんも、ローザさんも、タクさんも、ジョセフさんもハナさんもワシなんかよりも先に逝ってしもうて、ワシはほんまに何をしとるのかいのお…」

初老の女性の顔が歪む。

「ミリア先生は、あの子達にとって必要な人です。なかなかできることではありません」

「トシアキさんも、もう十分じゃ。みんな逝ってしもうたのに頑張ることはあらへん。そろそろ解放されてもええ頃合いじゃ」

「そんなことはできません。…ウパたちの死の責任は私にあるのですから。それに私が稼がずして、誰が孤児院を支えられるんですか。迷宮への出稼ぎは、私で最後にしましょう」

そう言って金貨の詰まった袋を渡す。

「一月分です。重いので気を付けてください。…それにまだ戦争は続いています。不幸になる子は増えることはあっても、減ることはありません。そのためにもこれは必要なことです」

「ほんまにのう。ほんまにトシアキさんは、【安らぎの家】の誇りですじゃ。こんなに長い間、こんな大金を稼いだ子は前にも後にもあらせん。トシアキさんなら、くたばることもあるまいと信じておるで。それに、あの世の皆が見守ってくださっておるでよ」

ミリア先生はオレの手を握る。子供の頃から知っている懐かし

い温かさだった。

オレの唯一の故郷、【安らぎの家】。

元修道女であるミリア先生と、腕自慢の大人数人が二十年近く前に設立した戦争孤児のための孤児院である。

当初の【安らぎの家】では、ミリア先生が一人で子供の世話を担当し、孤児院の運営費用は腕自慢による迷宮街での出稼ぎで賄われていた。そんな中で幸運にもオレを含む子どもたちは、愛情を与えられて育つことができた。

だが孤児のために出稼ぎにきた心優しい腕自慢を、迷宮が飲み込むのに長い年月はかからなかった。

そして、資金難によって孤児院の存続が危ぶまれた際に、愛情を受けて育った子供たちが迷宮街へ出稼ぎに行くのは自然な流れであった。

最初に迷宮街に出稼ぎにいった子供たちは、オレよりも十近くも年上だった。半年も立たず、次の子供たちが出稼ぎに行くことになった。そして五度目の出稼ぎ隊として、オレたちが迷宮街に足を踏み入れたのは、もう四年前になる。

「ミリア先生、そろそろお時間でしょう」

ミリア先生は長年にわたって月の最後に、孤児院の運営費を手に入れるために迷宮街にきていた。迷宮街へ物資を運ぶ、護衛付きの行商団と共に。

物資供給の行商団がお馴染みの商談をまとめるのには、そこまで

時間はかからない。 よって、このように会って早々切り上げてしまうのが常だった。

———迷宮街は大金を持って長居する場所でもないか

名残惜しさを隠して、オレは一月の別れを告げる。

「もう、そんな時間かの。ではトシアキさん、お体に気を付けてくだされ。あと、あの子らもトシアキさんに会いたがっておるで。暇が許すなら一度戻ってきんさい」

「ええ。ミリア先生もお大事に」

去ってゆく先生の背中が小さく見える。

線香の匂いが目に染みた。

5 ◇先生（後書き）

ヒロイン（老女）

6 ◇定食屋

ミリア先生を送り出したあと、オレは腹が減ってるのに気付き、行きつけの定食屋に足を伸ばした。ボリユーム満点な料理がリーズナブルな値段で提供され、むさい探索者にはおあつらえ向きの店である。

「イラッシャーイ」

定食屋に入ると、東部訛りの店員がやってきた。

「アノ、スミマセンガ、アイセキヨロシーカ？」

アイセキ？ あいせき、愛惜、哀惜、えーと、ああ相席か。

店は混雑していた。そういえば、安息日の真っ昼間だった、と納得する。

普段は迷宮を出て諸々を終えたあと、大体昼の刻から二刻ほど回った頃に来ているので、こんなに混んでいる定食屋を見るのは久しぶりだった。

「ええ、いいですよ。日替わり定食で」

あんまり混雑してるのは苦手だが、もうすでにこの定食屋で食う気分だったので仕方ない。

「アイヤー。ワカッタヨー。セキコツチネー」

店員に誘導され、席に向かう。

「あ」

「え」

そこには、赤毛の少女がいた。
今一番合わせたくない顔だった。

しばらく立ち尽くし、目で会話をする。
どうしてここにいるんだ。

この店は、年頃の女の子が一人でくるような店じゃねーぞ。

「アイヤー、オキヤクサンタチ、コイビトドウシカー。ナラチヨウ
ドイイネ、リヨウリシバラクジカンカカルカラ、ユツクリスルヨロ
シ」

おい、誰かこの店員の息の根を止めろ。
誰でもいい、はやく。

おい、そのオッサン。背中の戦斧で脳天をがち割ってくれ。
くそっ。あからさまに目反らしたぞこのオッサン。
周りも、この子に同情の視線を集めるのやめろ。

「お、お久しぶりです。《死神》さん」

やめて。そのあだ名でオレを呼ぶのやめて。
最近、ようやく

―――《死神》と呼ばれている（キリッ

の場面が夢に出なくなってきたんだから。

「一週間ぶりか？」

あの忌々しい場面からな！

「はいっ。あのあと、ちゃんと毎日訓練してるんです。《死神》さんの助言どうり」

だから、ほんとにその《死神》ってのやめて。あ、そうか。そういうやこの子、オレの名前知らないのか。

「トシアキ」

「えっ」

「オレの名前はトシアキだ」

「えと、ボクの名前はエリーです」

えへへ、と少女ははにかむ。可愛い。

じゃなくて、そうじゃねーだろ。バカなの？ アホなの？ アホの子なの？

このまま、「ご趣味は？」とか聞く流れみたいになってるじゃねーか。

「う、そうか…。ではなくてだな。なんだ。…訓練は上手くいってるのか？」

「はいっ。カリーナさんに魔法を教わっているところで、簡単な魔法なら使えるようになったんです。えっと、カリーナさんってのは「アマゾネス」ってグループの魔術師で、ボクは一カ月後「アマゾ

ネス」にお世話になることになっていて。それは《死神》さんの助言に従ったんですけど。それで、ああえっと、クーネさんと《死神》さんは仲が悪いんですけど。あ、そのクーネさんってのは「アマゾネス」のリーダーで。そういえばリーダーからは絶対に《死神》さんに近づくなって」

「落ち着け」

というか、この子また《死神》っていったよね？ しかも三回。オレちゃんと名乗ったのに。

「アマゾネス」のリーダーか。

そういや会うたびに「あんたなんて怖くないんだからねっ」って挑発してくる黒髪ロングの女がいたな。一向にデレる気配はない。照れ隠しであるというわずかな可能性が、今完全に消えたな。

「ごめんなさい、緊張しちゃって。こうやって対面していると何だか照れますね」

何言ってるのこの子。

おい、その定員。なんか変な空気になってるぞ。

お前のせいだからな。早く飯もってこい。

「それにしても、飯まだかな。君もオレと長い間一緒にいるのはまじいだよ。オレも信用するなと言った手前、長々と話すというのも……」

「あつ。そのことなんですけど」
「おずおずと少女は口を開く。」

「保留ってことでいいですか、信用するなっの」

「は？」

思っていたことがそのまま口に出てしまった。

「えっと、助言してもらったし。右も左もわからない状態で助けてもらったというか…。《死神》さんのことよく知らないのに悪く言うのも、おかしいと思いますし。あ、そうだ…」

——信用するな、ってのを信用しないってことでどうでしょう？

開いた口がふさがらない。

何この子上手いこと言ったみたいな顔してるの。

アホの子だ。完全に今オレの中で第一級アホの子認定が済んだぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9037z/>

迷宮街の死神

2011年12月31日11時47分発行